

肌が作る形

杉田栞遠

高級感が

女性の肩が作る長方形に宿る世界
ショートした頭を曲げられている

ブルマが嫌いだった母は

男女共用セパレートタイプの水着が出たことを
家で僕から聞いた

学校の運動場に住みつく黒土から

上がる熱気をどの体で受け止めていたのか

小中学生の頃の水着の記憶がないのは

学園モノアニメのおかげ

プールで出会った年上の人が忘れられないのは

プールのCMが存在するから

ワンピースを着ると浮き上がる

破られた紙の上で寝る

服が僕の前に立っている

ふとももも肩も二の腕も誰も知らない

おしゃれは

異性の反応を無視できない

服が重なる

周りの声にハミング

肌が作る形に

亡くなった祖母の骨の形を思い浮かべている

浄土へ至らず

仲井和奏

さようなら　またあした

小さな嘘がついてくる

一歩進めば一歩と少し　ついてくる

嘘を許していた

わたしが嘘だと知っていた

幼い過去

本当のことなんて　わたしが生まれる前に

ついててしまったのだと

ついでに知り得なかった

そのきれいな刃物　傷をつけていくこと

どれもきたなかった

目を覆ったまま逃げた

守りたかった

誰も守れなかった　あたたかいひとりぼっち

愚者り

土砂り

音が隠していく

どこまでも暗い景色が映る波

底へ身を委ねた

心臓を砕く痛みも

脳を撫でる苦しみもない

ああ 救いだ

その夜は 全てが見えた

無数の指がわたしをくった

温い絹が

やがて包んだあなたを運んでゆく

見知らぬわたしも手招いて

極彩色を連れていった

口先で何も触れなくていい

指先はわたしのためだけに

だれかの刃物も

もうだれもわたしをわからなくていい

わたしもあなたをわからなくていい

そんな海が夢だった もうどこにもいない

目から滲んだいのちのと混ざり合っていく

わたしたちがいるばかり

寒い肌 が もう 不安なの！

肺を満たした苦しさが砂に溶けてすくえない

服についた砂だけが次のわたしたちにとけていく

ありがとう、おはよう。

交信

刈田真緒

梅雨が来ると融解する身体は重くなり、
しかしながら翌月には白くなる細胞に蝕まれるのだった
実像を拒否した代償、と
剥き出しの空城さえ濾過機に供するが
星もわたしも発火はどうにも未熟であって
穿てない

無機質な点滅の投影さえも煩かったから
先の静寂を採り揺れる
莫大であればあるほど
黒鉛は閃光の印象を残す
破碎、と名付けられた振動が
もつとも確からしく馴染むことだけが判った

迂遠な風に吞まれた朝に
不可能性は美德だと知る
透明になっていくほねを撫でたらしなり
それはなめらかな排他の受容
何郡目の波であったかもわからないまま
切り取るだけの熱線に委ねた

涙の流速について

小幡曜

たまに泣いてしまうときがある

目をこすってみると

涙の軽さに驚く

眺める涙はもっと重かったはずで

顔の縁をつたうことさえできなかった

涙

川で化石を探している、その胃の中から

水の音がする

瓢箪の内に溶けていくように、

冬の川の含意が聞こえた

ヒンヤリとしたものに手首を撫でられて

血を遡上していく

（血縁者の軽微な水難がモニタージュされる）

背中をひとしきり冷たいものが滴ったあと

河川敷の焚火の痕が息を吹き返し

埋められた不法投棄の自転車が這い出てくる

感情が感情の淵をなぞっていく

だから、すこし泣いていた

ヒル

杉山心

おいてきた、あの庭は、

血だまりたちの、白亜の丘で、

(きこえない？　こんなにも、雷鳴。)

息閉じて、田螺を追って。

やさしい言葉が散らばる道を、

わたしがかすれてゆきました。

ねえ、水曜日。凍ったパンをきりおとし、

林檎をつけて食べるのは、

はぐれたわたしの因習です。

愛の試練 *Allegro moderato*

赤津将大

すでにぬかるむ荒野の夢見に

方々で降る、小鳥の線

鼓のまるみが嵐を転がし

疾走する

燃え尽くすまで振られる指揮棒に

——裏では水晶が電線のように

男と女の声が沈黙の顔を結んで

むこうの原林

下闇の水が自分の腹を舐めている

取り巻く力強い生命の数々

ばらばらと舞い

ゆっくり流れる舞燈籠に昼の星屑

葉隙の結び目もあかるくほどけて

足場がない

魂の

白い涙が幾つもの体から流れたこと

かつて 彼や彼女とただ一つの心を揉み

実の抱擁をした

肋骨や腕の潜る音から 沖へ

ひろがるあたたかみに一滴の

あなたが無限に垂れ

光が落ちた

潤う夜をまっすぐと絶え
親指の弧で拭うように
あなたはしゃがんで見つめてくれている
仄暗く浮かぶ翠玉の縁に
空の靴

熱いきぼうの厚みを踏んづけ
ぼとぼとと横たわる成人
たのしいちいさなあしが聴こえて
眠りの工房は空にある
冷氣と後光を放つ青年の
チェンバロの金糸刺繍に洗練された袖も
舞踏曲は遍く交響する
死後と生後のかさなりにしろいたいきはせなかで抱擁する
その腕に ふたなりの明滅を感じ
うつくしい

意識も漏らさず倒れた者が
言葉を漏らして立ち尽くす

肅々と歩行、苛立ちはわずかな火の粉
尊ぶべし
高い襟を鼻まで潜らせて深く
鋭い光を鳩尾まで集めろ
腕を伸ばせ、俯いて
関節を讃美しろ
鏡よ鏡、この世でいちばん美しいのは鏡
誰にも示さず、ペンタクルを書記しろ
世界は闇だ

だが待つな、時間など存在しない
婚姻を取り持て、鈍重な僧侶の服だけパクって
今に闇はあかるい

ゆらり かさなり

鉄の膝から立ち上がる

なおもピアノや弦楽が

枝幹に纏わり黒く沈めて

ステンドグラスは煌びやかである

白い水面の連弾も 明白な調で階調を成し

収まる 窪溜まりの薄い固定に

もたげた首が重くなり

吹き抜ける

奥の

虚空に翡翠のビーズが一つ

うつされる

引き裂かれた固い腕が一つずつ

無数に隊列している

ぐったりとしたあなたの顔や

わたしの胴

肌は品位をすらっと保ち

古く湿った壁龕で 一斉に

静謐を呼吸している

仕方

松島和志

食堂で、私はスープを配分する。一皿に、二回すくう。スープが残り少なくなつて、一度にすくえる量が減つて、底にあたる金属の音が鳴りだすと、一皿分には三回だ。つまり、ある労働の仕方では働くのではない。ある労働の仕方が働くのだ。風がカーテンに姿を与えるように、仕方は私に姿を貸す。ある仕方が無ければ、別の仕方が私を膨らませ、立たせ、せき立て、要らぬことを言わせる。私と私の言っていることの隙間に、苔が這う。寢床で、私は咳の仕方を体得する。するべき深さと回数を心得る。うまくやっていくほかないのだ。背中の熱の逃し方も知る。隙を見て、嘔吐を試みる彼の倒れる上体を、両肩の二点で戻す。その繰り返しの中で、彼は私を上回るための新しい手段を採らない。そこには礼節のような詩学がある。祈りの時に目を瞑らせるのは、祈る唇のうつくしさを逃がすためかもしれないが、ただ口にするだけでよい祈りの言葉はもはや物であつて、仕方とは存在することのにじみである。睫毛の上に塵がつもっていく。そのうるささ、漂流する重み。

ウェリントン

熊谷滯

遊園地のジェットコースターにメガネを置いてきた

気づいた時には届かない場所に行ってしまった

すみませんメガネを忘れてしまいました

これですか？ と差し出されたメガネは少し角ばっていた

違います、私のはもっと丸い

これですか？

違います

これですか？

違います……

次々と出てきた

どれも丸くない

待合室に通される

なぜか大きなチョコレートケーキを出してくれた

メガネをなくしてかわいそうだからと

気を遣わせてしまったらしい

斜向かいには大柄な男が座っていた

こちらを見ている気がしてとても不気味だった

その後のことは、あまり思い出したくない

次の日は、歯医者助手になって子どもの耳にピアスをあけた

あまり痛そうじゃなかった気がする

教室

長谷川美緒

ぱりぱりぱり。怒ったように空が鳴る。誰もそんなことには気づかないふりをして教科書の音読を聞いている。声がとても小さい。ぜんぜん聞こえない。でももっと大きな声で、と頼んでしまったら、空の鳴いているのをみとめることになるから、やっぱり誰も何も言わない。先生は机と机のあいだを注意深く歩き、窓のほうには目をやらないようにしている。

どごーん、と重いものの落ちる音がして地面が揺れる。青白い光の帯がまだらにガラスの上をはしる。窓が震える。

「デンキウナギだ」「おおきいぞ」「バケモノナマズじゃないかな」「なんだよそれ」「知らないのお?」。蛍光灯が消える。悲鳴があがる。落ち着いて授業中ですよと先生が言う。先生には見えないのかもしれない。灰色のはらのたくらせ、校舎を絞めつける巨大な生きもの。ぬめったからだか窓ガラスをいっばいに塞いでいる。雨が降って、降って、降って、蓄電と放電を繰り返す。音読が再開される。

わたしたちはもう帰れないだろう。順番に一行ずつ、教科書を読む声が迫ってくる。わたしはしゃくりあげる。文字を追うことができない。音読は止まる。教室全体が止まる。横隔膜の震える音だけが染みのように発生して、広がる。

蛍光灯が点く。バケモノナマズの尾が名残惜しそうに、何度かぴしゃぴしゃと窓を叩く。先生は困ったようにわたしの机の横に立ち、震えが静まるのを待っている。

骨を待つ

福原英信

坑口から見える糸が揺れる。

帰ってきたのか。骨を持ってきたのか。

骨があれば、父がいたと思える。数日後に生まれた遺族は父の温もりを知りたかった、と。

まだ見つからない。海底の地図がまた書き加わる。少しずつ、少しずつ。

作業の合間に、骨が現れた。警察に届けた。人なのかと、刑事に問う。海鳥と分かり、没になる。

待つことが死を活かす。八十年を百年にするために。見つかってないのに、戦争が終わったと思えない。三十年問いかけてきた。

待つ間にも、老いていく。見つかるころには骨かもしれないと遺族はうつむく。

冷たい海の底から出してあげたいとつぶやく。

骨を追いかける人を追いかけるために、髪をとかす。ドライヤーで髪を焦がす。獣毛が焦げたにおいが漂い窓を開ける。ベテラン刑事が、人の燃える匂いが分かれば一人前だと言った。夜中の警察署は蛍光灯が切れそうだった。

爪が伸びていたので切って、ゴミ箱に捨てて、出かけた。

三人姉妹

緒方水花里

1

三人姉妹

塩と月のない海の町に産まれる

一人が一歳を迎えた次の朝

母親は他の男と駆け落ちしていなくなる

父親はときに恨みもなしに棒を振り上げる

尼寺にやると脅されながら生きる

一人は大きく腹と脳髓が肥え

一人は中ほどで蒙古斑と鼻糞黒子を持ち

一人は小さく鼻が潰れる

三人とも既に死んでいる

2

三人姉妹

パソコン一つで喧嘩する

一人は包丁を持ち一人を人質にとる

一人はそれを気にせずリモコンを投げる

二人がトイレに立て籠り一人が流血する間に

画面に当たりパソコンは割れ

三人バラバラに指をさす

一人がいつも生贄になる

3

三人姉妹

夕べの食卓はない

一人は給食のパンの余りを持ち帰る

一人は友達の家で食べさせてもらう

一人は二人のために初めて台所に立ち

三人全員食中毒になる

父親は一人を殴るがあの生肉がなかったら

三人とも骨になっている

二人は一人のために祈る

階下に向けホラーマンの歌を唄う

4

三人姉妹

放課後もが苦行を強いられる

一人はくもんから逃げ出す

一人は逃げ出した一人を自転車で探し回る

一人はお迎えで誰もいなくなる保育園で泣く

探すことを諦めた一人が迎えに行き

サドルに乗せ帰って来ると

一人が庭でくもんの宿題を燃やしている

一人の天才に三人で次々と燃やす

雨が降り埋めたくもんが出土すると

父親は呆れて家を飛び出す

三人は腹を空かせながら

夜の自由にひひひと笑う

5

三人姉妹

一人は脳髓を七十五キロまで偏らせ

一人は二重手術とボイトレで女王になり

一人は *tinder* で三カ国語を習得し

おのおの立ち上がる

ネズミの出る家を出る

破水する吹き抜けの天井

落下するシャンデリア

美しい雨と剃刀シャワー

父親はただ一人居残り

猿を殴る動画を見ながら自慰する

まばたきも笑いもせずずっと

6

三人姉妹

決して種を撒かない

父親にも黒い棒は振られ

その父親にもその父親にも振られ

産まれた時から臍から発芽し

蔦に絡み取られる

三人とも子宮を耕かさず

一人が空中ブランコの上で初潮すると

二人でナプキンをズタズタにする

鋼になる陰毛を抜く

7

三人姉妹

ネズミの国に向かう

三本のモンスターの乾杯

誓いを立てる

うちらは何故こんな家に産まれたんやろう。でも産まれてしまった以上、死なないかん。殺さないかん。呪いの血を絶やさないかん。喧嘩する度に三つの手を重ねさせ合わせられたがあれは嘘で、うちらは永遠に仲直りせん。うちらは敵同士や。肉とパソコンを奪い合い、刺し違え磔にし合う。そうしてここまで生きて来た。そうせんとここまで生きて来れんやった。うちらは敵であり戦場を共にする戦友。うちらはうちらと戦う。血と目的を一にする。完遂せよ。

そうしてネズミの国で略奪を始める。

三人とも死んでいるので

その日のことは全く覚えていない

8

三人姉妹

一人は命を四十キロ落とし生理を止める

一人は四十万人の追従者フォロワーの子を墮胎する

一人は四カ国語めから女言葉と性交し

三人がかりで子を殺す

義父と母親のシーツを剥ぎ

かついで卵をしぼりだす

一人は決して四人にならない

母親は無事流産する

9

三人姉妹

めいめい違う場所で首をつる
だが一人が一段高い所に登ると
二人が引きずり下ろすので
三段ベッドに生涯足を付け
そこから世界が見渡せる
されば嗤う
三人とも既に死んでいるので
生きていかねばならぬ

書ける気がする、という感じだけがずっとあった。はじまりは十三歳のときで、年明けに日直が回ってきた。黒板を消すのと日誌を書くのが仕事で、黒板を消すと手がかゆくなるから嫌だったけど、日誌を書くのは嫌いではなかった。

日誌を提出するのは朝のホームルームの時間だったから、私は登校してから日誌を書けばいいと思っていて、それでいて校門を入ってすぐのところにある渡り廊下で先生に日誌の中身について話そうとしていたのだった（先生は毎朝渡り廊下の掃除をしていた）。渡り廊下の上にはすのこが敷き詰められていて、土足で上がることができた。先生はヒールのある靴を履いていて（すのこの目に挟まらない程度には太かった）、あの学校にはほかにヒールのある靴を履いている人はいなかったから、私（たち）は足音だけで先生を見分けることができた（そして先生の身長をからかうこともできた）。

その日も先生は渡り廊下の掃除をしていた。腰くらいまでの細い箒を持って、すのこの上につもった細かいほこりとか砂とかを、すのこの間から床に落とす。やっぱりヒールのある靴を履いていて、私は何となく目線を下げながら近づいたのだった（目礼、という言葉も知らなかった）。先生は私に気づいて、私は先生に日誌の内容を（これから書く予定で）話そうとして（今日はたぶんいい天気で）なんとなく挨拶などをしようとしたのを遮って（風は強かったかもしれない、スカートがひと二人分の幅をとって）先生は、今朝は寝癖が治らなくて、と言った。私はそこではじめて目線を上げて、やっぱり書ける気がする、という感じがあるのを確かめる。でも、先生に何を言えばいいのかはわからなかったし、先生が箒の指す先を見ているのに気付いたただけだった。同じ場所に目線を向けたところで、漠然と、書ける気がする、と思うだけなのだった。

何となく黙り込むのがいやで、靴の中に砂が入って、と言いながら昇降口を通り過ぎ（ついでのように靴を履き替えて）教室に入る。机の中には、授業中にこっそり読もうと思ったネット小説のコピーが入っている。それが変わらずにあるのを確かめてから日誌を開く。やっぱり何かを書ける気がする、と思うが、書き始めない方がいいのかもしれないという気もして、窓の棧に乗っている、ほこりの塊を鉛筆で写しとろうとする。風の強い校庭で、砂が舞って一面白っぽいのがほこりの後ろにあった。

産まないぼうや

奥山紗英

ぼうや

産まないでおいであげる

ビーズも

お庭も

中学受験も

パソコンの外にこぼれてる

飼われるはずだった犬は

かわいい老夫婦に飼われている

暖かいミトンを編みかけてる

ぼうや

あなたは粒子で美しい

ワンルームに広がるぼうや

四月、五月

牛島伸陽

生きる意味って何？　なんて大袈裟すぎるか。じゃあ毎日毎日、生活していくのはどうしてなんだろうって。こんなこと思ったことなかった。でも今思ってるってことは、思わないようにしていただけかもしれない。どうせおれには流れに棹差す勇氣なんてないから。ならなんとなくでも、生きるしかない。だいたい生きる意味とか考えなくてもしばらく生活ができた。好きな学校に行く。好きな友達と会う。好きなお酒が飲めるようになる。増えていく。好きな時に映画館に逃げ込む。気の済むまで日は延ばせる。思いのままに夜を伸ばした九畳間。狭くて広い部屋は安全な宇宙。なんとなくで楽しく生きていられる。あくまでファッション辛さ。生きる意味って何？　考えている時間。無意味とは言わないけれど、だってなんだか合理的じゃない、って思ってた。生きるしかない。おれには生きていくしかない。心も身体も、まだ死にたくないし。もしみんないなくなる時はおとなしく一緒にいなくなりたいと思うけれど。それだってひとりならまだ死にたくない。一緒に死にたい人と一緒に生きたい。ミヤザキさんと一緒に死ねるんだった悔いなんて全然無いからきつと本望。だから今は生活する。部屋の中でミヤザキさんを眺める。それだけで溢れてくる生活の匂い。生活を続ける。

こっちの水道水はまずい。そのうちに浄水器を買わないといけない。醤油にも味噌にもまだ口が慣れない。空気が悪いと悪態をつく。毎日眠くないのに早く寝る。毎日眠いのになんか起きる。日の入らない部屋に座り込んで、一日中画面と向き合っている。たまに逃げ出したくなる。ぐっと堪えている。お昼にカップ麺は毎日食べれば飽きるから、パスタ一五〇グラム茹でる。冷凍うどんを茹でる。それにも飽きたら冷凍の蕎麦を見つける。冷麦二束は一人には多すぎる。夕方五時のチャイムはきっかり一分間。ここは東西線の街。

土曜の朝、すいている電車の窓からスカイツリーが見える。風が強く吹く。ここは海の近い街。新浜通りは海拔〇・五メートル。駅まで歩いて十五分。ひとりで歩けば遠いし、ふたりで歩けばもうちょっと短い。十八時四十分。会社から帰ってくるミヤザキさんを迎えに行く。十九日はケーキ屋さんに寄り道してからゆっくり歩く。二十四時間営業の西友。お惣菜と朝ごはんだけ買って帰る平日。心なしかよそよそしい菓子パン。サイゼリヤでグラッパ飲んだら金曜日。家に帰ればミヤザキさんの小さなお弁当箱を洗う。大きな青い水筒を洗う。三日に一回、洗濯物を室内干しにする。ミヤザキさんが会社に着ていくシャツに、覚えてたてのアイロンを丁寧にかける。夕飯に餃子を焼いたらフライパンの油を拭き取る。油って、そのまま流したら水道局では赤いランプが点くらしいよ。一度の間違いは繰り返したくない。主夫になりたい。まだ慣れない。西浜公園。テイクアウトのピリヤニ。週末のショッピングモール。南行徳は光の森。道端にトカゲが消えていく。じきに夏が来る。

ひとり暮らしは、五年目ですね。自己紹介が終わった延長線上でふと口をついて出たけれど、それは嘘でした。よく考えてみたら、ぜんぜんひとりで暮らしてなかった。少なくともここ一年くらいは、ミヤザキさんのために生きている。自分でも気づかないうちに、どうやらそうみたいだった。こんなにも救われている。ぼくはもうほんとうのひとり暮らしはできません。寝る前に一言でも電話しないとんだか寂しいなんて、本当に人が変わったみたいだ。知らない自分に戸惑う前に、ミヤザキさんはスイッチが切れたように眠る。卒業式を待つて戻ってきたミヤザキさんのみじかい襟足。黒染めしたてのカラー剤の匂い。爆発するとめんどうだから、シャワーは朝に浴びることにして先に寝てしまう。それもそろそろやめて、ちゃんと湯船に浸かるう？ でもそうすると身体はかゆくなるし、でもシャワーで済ませると首も肩も凝ってしまう。汗かく季節をミヤザキさんは嫌う。落ちていく夢。暑がるミヤザキさんは隣でトップスを捲り上げてしまい、ぼくは眠れなくなる。二十三時半。境界線をぐちゃぐちゃにしながら落ちていく。すっかり慣れきってしまった、ふたりでひとつのシングルベッド。寝言が聞こえない。ふた

りがまたひとりひとりになる。枕が移動する。またひとつ生活が消えていく。

初任給が入金された四月の金曜日。綱島の男の子たち。社宅でも部屋の中では当たり前になりひとり。寝付けないから入浴。自律的な自慰行為。修正する。たまにもっと早起きする。本当の満員電車に乗る。名前だけ知っている街が、生活の一部になる。電車に乗っている。貯蓄用の口座なんて開設したから、簡易書留でキャッシュカードが送られてくる。家にいないから、再配達の手し込みをする。ミヤザキさんがすこしでもはやく貯金ができるように、食事代ぐらひは多めに払いたい。でも今のうちにぼくだって貯金しておきたい。だって来年には一緒に住みたい。ちよつといま、つらいかもしれない。でも貯金するしかないから。そのために働く。そのために生きていくしかない。これだってできるんだって、証明するしかない。きっと一年前ならつまらないと言うだろう。でもミヤザキさんと二人で暮らすことができたなら、それがどれだけ素晴らしいことだろうって、毎日考えている。一日の終わりに一緒にいる。一緒に寝る。それが毎日になる。片道五四三円で飛んでいける今の暮らしもべつに不満じゃないけれど。ぼくは帰る家だって同じがいい。貰った合鍵は絶対になくさない。さつさと三百万円、貯金してみせたい。指先で摘んで持ち上げた計画性。近い未来が見えないから。ぼくにはほんの少し先のことさえ想像ができないから。引越してきた次の日、ひとりで渡る鶴見川は長かった。四月三日。電話の向こうのミヤザキさんの前で、ぼくは泣いた。木曜日、ひとりで飲むノンアルコールビールはあまりに不味くて笑ってしまった。情けなかった。だから未来を見る前に、まず貯金からはじめる。たとえ面白くなくても、生活は止められない。過去の速度ははいけど、未来の速度は遅いままだって。ミヤザキさんが言うなら。その遅い未来と一緒に生きたい。小さな未来をツリーに共有する。日曜のお昼、携帯ショッポ。そのあと四つ角のイタリアン。ペペロンチーノにしらすがかけて放題。ぼくの誕生日、ミヤザキさんは平日なのに即興でいちごのケーキをつくってくれた。週末には手紙までくれた。新しいスニーカーで歩く。新品のめがねの匂い。

お気に入りのベーカリー。思わず笑ってしまった。惰性の羅列じゃない。今度は本当に嬉しかったから。

健康な生活をやめない。作業じゃない。出社の日はお弁当をつくる。タッパに二日分ずつ。狭いキッチンでも、料理は止めない。小さなバスルームで、たまにはお湯を張る。社宅の光熱費は定額。生活は当たり前じゃないから、必死こいてやるしかない。日比谷線の二人掛けの座席にはミヤザキさんとふたりで座りたい。健全な定食屋。黄色い壺漬けを食べて、ミヤザキさんが働いていたファミレスを思い出したい。金曜の夜は日高屋でいつか、にも、土曜日の夜はバーミヤンでいつか、にも、時々なりたい。駅前のパン屋さんにはたまごドーナツ。夕方のマルエツ、割引シールの卵焼き。じいちゃんが昔つくってくれただし巻きを思い出したい。じいちゃんの言うはんぺんは卵焼きだった。お父さんみたいな大きなくしゃみは我慢できるようになりたい。二十歳みたいなリクルートスーツは早く卒業したい。はやくふたりになりたい。ミヤザキさんの胸の中はセーフティ・ゾーン。裸で抱き合う以外の確認方法。ミヤザキさんが部屋着にしている緑のジャージ。ミヤザキだ、と胸のゼッケンを指でなぞると、まだミヤザキだよ、と笑う。原色が似合う。お気に入りだった柔軟剤は販売停止になりそう。たばこの匂いがなんだか苦手になった。でもこうして笑っていたい。米袋をひっくり返してうずくまって泣いているミヤザキさんの背中をけんめいに抱きかかえる台所。ミヤザキさんの目から水が、ぼくのTシャツの左胸までファンデーションを運んでくれる。ミヤザキさんはたまに泣きむしになる。そんな日になるべく一緒にいたい。黒板の裏側も、ベッドの下の景色もまだ忘れてない。自分の生活はおざなりにしたくない。逃げずに歯医者行く。コンシーラーなくさない。この暮らしは背後には置いていけない。今日も明日もミヤザキさんの隣にいたい。まだこれが第一幕だと思いたい。きっと同じ層からこの世界を見ているから。波が高い。だからあと三年待つ。海が見たいね、はもう遠くない。方角を合わせる。朝になったらすぐにカーテンを開ける。あじさい。六月になる。雨が来る。

日本の海岸線の長さ

ローレル・テイラー

ある寒い春の日に • 錆びつつのバス停から砂浜まで歩き
あそこで海の膨らみを見守る 夏になるとこの北国なのに
ここなら海を泳げる •

• 拍子木がちょんちょん叩きなり 幕は開く
うちの学生の叫び声と両親の注意と足指の • 間の砂の粒の妙な感触
その時

ワンピースの裾をあげ私と炎の女は二人で瀬を • 歩き 海星と子ガニ
の動きを

覗き このような寒い国の海がこんなに暖かくなることに驚き話す
そのワンピースは袖がないし日本の文化に認識しすぎている私はこの
裸の肩を自分の学生に • 見られることは悪いかもと悩みながら
今まで草原ばかりに • 囲まれている思い出に対するこの

理解もできないほど広い水の面にあつとする 砂浜の端
からたこ焼きとレモネードとテキ屋さんの招き声が

混ぜ合い • あんまり賑やかな空気に圧倒されそうなのに
瀬から上がりがたい 腿まで暖かく優しく

恋人の • ようにそつと触れあう水が
ワンピースの裾と遊びながらテキ屋さんを

反響し招く • 人間はもともと海からのもので
海に帰ったら 上に鷗と太陽が互いに

この人の群れを目指す • 鷗はポテトを盗み
太陽は肌をやき その間に空は明るく青く輝く

• 拍子木がちょんちょん叩きなり 幕が閉まる

四月といっても

•この寒い国に雪がまだ

溶けていない 海から鋭い風が強く吹いてき

ほっぺが日焼けでもされたように •燃える

平日と寒さのせいで私はこの砂の上に一人

子供は学校にいるし •両親は職場で働いている

足元に海が入り出入り出 その定期的な動きが私の心を奪う

水に入っていないくても水から上がりがたい ここに この塩

の香りに包まれながらずっといたい •水と砂が合う線の美しさを

暗記したい 記録したい

•芝居ではなく具体的な何かで

この小さな街でも工具店はある

•はずなのでスマホで

調べそこへ歩く あんまり小さい店でもとりあえず金槌

と釘は絶対にある •店員さん いや店長のおじいさんが私

の焼かれたほっぺと金の髪にあやしい目を向きながら

ビニール袋を渡してくれる •私はこれからどんな修理を

するかおそらく想像もつかない 砂浜に戻り遠くの水平線の

漁船を伺う 何隻かが昼寝でもしている鴟のように •荒い波に

ひょいと浮かんでいる

•拍子木がちょんちょん叩きなり 舞台を

あらためてよみがえらすけど その時に漁船があつたかどうかは不明

昔教えた子供たちの多くが漁業に関わったに違いない

イカやホタテやサケが •とれるこの町には

子供の明日が限られている 私の元生徒がもしかして今

そのうたた寝の船にいるかもしれない 海に帰っている •かも

しれない その大人になった子を羨ましく思いながら

修理を始める 砂が乾いていると乾いていない

線を測定しあそこに十五センチほど •ある釘

を打ちはじめ 砂は腿のようにへこみ

釘は優しく涼しく沈むきらりとする金属が

太陽の下に海の記録になる 打った途端海が反対し

• 前の線

より浜を上る 頭の中の芝居と今の懐かしむ頭脳が

混ぜ合っても私は砂と水の裏切りを憎むことはできない

•

海が変わらないものになったら海ではなくなるからだ

次の釘を打ちその線の打ち消しを待つ 上げ瀬に

• がっ

かりされないまま撃ち続ける 釘がなくなったら今まで

の足跡を振り返る 鷗の鳴き声が釘ほど鋭く拍子木

ほど大きく響く 炎の夏と今の灰の春が

•

重なり私が歩いた線を目測してみる

約二十メートルに約十年の春に

•

約一億粒の砂に

約五十本

の釘

に

•

海の

唸り声

に

•

•

白い藻

濱田湧壮（熊本大学）

地元の母から送られてきた段ボールには

藻が詰まっていた

白くて生温かい藻

僕はその藻をまとして会社に行く

友達と飲みに行く

人に電話をかける

藻は細い腕の形をして

僕のからだに巻き付いている

散歩しながらスマホ片手に話をする

水族館に行きたいねという話

何が見たい？

そのあと何食べたい？

僕は電話口のその人に

差し出したいものがある

差し出されたいものもある

藻のつくる手のひらが僕の口を覆う

もう片方の手が足首を掴む

僕は何も言わず電話を切って帰途につく

父の単身赴任が決まったとき

母はなぜ泣いていたのか

散々赤黒い痣をつくったのに

写真だって残してあるのに

母と手をつないで警察署の鏡張りの建物の前に立ったとき

僕ははじめて自分の輪郭や色を知ったのに

母は父のために嗚咽を漏らした

どんなにぶつてもその色に染まるわけではない？

僕は裏切られたと思っっている

水族館に行きたい

アオリイカが見たい

という僕の腕を白い藻がつかむ

行っってはだめ

どうして

その行為は白くはないから

白って何

何も与えないこと

何も受け取らないこと

少なくともそう努めること

それでもアオリイカが見たい

ガラスの向こう側に行こうとして

尖った口元を何度も折るアオリイカ

折れては退き また進む

藻はそれを見る僕の腰にまとわりつく

僕は藻の手の甲にふれる

白でなく赤ならどうですか

あなたがそうだったように

藻はぎゅっと拳を握る

半透明の実況

菊地もね

——仕事に遅れようとしながら——朝の支度をこなしていました——まっ白な窓枠が切りとる風景は——高層ビルの群青で塗りつぶされていて——都市生活をえがく映画のつもりでしょうか——オフィスに向かう道すがら——いつのまにかカーレースに巻きこまれています——おおぜいの同僚が参加していて——運転のしかたなど忘れた私は——いちばんつまらない順位で終わったようです——反省すべきその結果は——灯りのないシャワールームでぼろりと確かめられました——プールの湿った更衣室——ペールピンクのカーテンを引き——天井についた小さなモニターを見あげている構図です——頬に落ちてきた大粒の水滴をぬぐって——かたまりになった黒髪を排水溝へと流してしまえば——感情を示すあらゆる証拠の隠滅が済んだと見えます——壁のタイルに反射していた光景も——風に踊らされている街路樹たちには届いていません——それでよかった——さあ——まもなく次のレースがはじまります——また準備しなければと大階段を駆けおりと——世界がこんなに広いとは知らないままで——かつて尊敬していた人とすれ違いました——「失望したよ」——その声の肌理は——記憶の砂嵐にかき消されて久しいですが——謝りそこねていたことだけは——この耳鳴り——はつきりと思い出されました——「もう行かなくちゃ」と早々に走りだします——逃げたのでしょうか——本棚ばかりの言い訳がましい廊下を進むうち——瓦礫が積みあがった無愛想な道になり——やがてたどり着いたのはコンクリートの基礎が剥き出しの広場でした——雨水がたまっている凹凸ひとつひとつ——凪いだ水面をくずして進みます——長靴は履いていませんでしたが皮膚で感じられるものではなく——そう考えるとはじめから——脚もなかった気がします——今回の会場でもみな——あわただしくレースの準備にいそしんでいるようです——同じ行動をとったほうがよいことは明白——どこに向かって何を競いあう

のかわからないのは嫌でしょう——あたりを何周も歩きまわって忙しいふりをします——結局のところ準備すべきは競馬だったようですが——
A2345678910JQK——すでにソリティアをはじめてしまったので手遅れです——
KA2AKQJQ——3432——いつまでもうまく上がれません——765——
——その価値観が間違っているのではないですか——89878——結果が出ないのなら——45654——そうなのかもしれませんね——32A——ああ——
——ついに銃声が弾けました——馬たちがすぐわきを駆けぬけて——いつまでもそこにいるのでしょ——8Q6365K7428J5A42584Q3A7329KA——あとは勉強してください——

かたち

藤岡芽生

指さす一点からも

ひとはあいまいで だけど

ふいかな呼吸から

世界はかたちづく

ゆるい水着が濡れはじめ

境界を見誤ってゆくように

あるいは

満ちた製氷皿の一角にはしる

たしかな決意の亀裂のように

とけこむ ことや

ぶんり ということがら

水面にある一点の自我
が

だれのくしゃみによってか 移ろう

そのときに、いったい

どちらのことがらが起きたのですか と尋ね

一面にこだまし

たったかたー とだけ

返った

明るいサンルーム

プランターがひっくり返り

水びたしで

床は輪郭を失い

歓声をあげて走るこどもの

はだしからいま 生まれはじめ

一点の自我、

一点のあかり。

満ち満ちる半濁音のよろこびや

また だれかのくしゃみの先

に

洗濯バサミにはさまれ そよぐしつもん。

今

せかいにさざなみが立ち

ふたたび境界をなくすものたち

あ、でも

これはいつもあった

ほら

乾いていく水着

一面のこだま

稲村ヶ崎海岸

永井花音

波打つ稲村ヶ崎海岸

かつては広い、黒い砂浜だった

いま、潮騒が岩を叩き

泡立つ白はすぐに吸い込まれ、姿を消す

崖の麓にぽっかり開いていた小さな洞穴

それを守るように、びっしりとへばりつくフジツボたち
すべて海面に吞まれた

岩肌に残る、黒い砂の最後の記憶だけを残して

この場所を本当に守っていたのは、

崖の上に眠る、ひっそりとした砲台だった

かつての畏怖、かつての誇り

今ではツタに覆われ、歴史も静かに沈黙している

その下で、若者たちはそれに背を向けて

スマートフォンのカメラを海に向けて構える

足元の砂は、いまでも黒い

海も、どこか重たく、濁って見える

それでもあの頃、漁師はワカメを売っていた

声は届かぬほど低く、手は潮風に馴れきっていた

その黒さの下には、ワカメが揺れ、魚が泳ぎ

命は、見えないままに満ちていた

いまはどうだろうか

その命はまだ、そこにあるのだろうか

ここは由比ヶ浜ではない

観光地ではなく、語り継がれる場所でもない

それでも私たちは知っている

この海、この海岸が、遥か昔から

私たちを、ずっと守ってきたことを

あの震災のときも、

津波はなぜか、ここを大きく呑まなかった

誰かが祈ったのか

それとも、この土地が

まだ私たちを見放さなかったのか

この土地の人間は、海を愛し、海を恐れる

愛しすぎて、近づきすぎて、

ときに海に背を向けられる

それでも海から離れられない

潮に運ばれる記憶とともに

室町の昔から、私たち一家はこの土地を愛してきた

それなのに

この土地に、どこか恨まれているような気もする

恨まれているようで、抱きしめられている

拒まれているようで、許されている

そんな土地に、私は今日も立っている

シャッターは切らない
誰かに見せるためではなく、
ただ、波の音に耳を澄ませながら
この黒い海の重さを
ひとりで、静かに背負っている

未回収

作田琉珂

ロング・ロングタイトルコールは

『微睡の中でかろうじて認識できたのは

「ら」の予測変換の中で泳ぐラフマニノフで

私の知らないところまで行ってしまうそうだったから

次はらっきょうとかであって欲しいと願うばかりの

季節も二ヶ月前には終わり

なんでもない駅で乗客全員が降りる可能性だってある

電車に揺られながら進む君と僕が脇役の

ロマンス映画の名前は』

で、そんなシーンあってもなくても良いのだけど。

こうかい

梶田星良

海のおいがするあなたと

しばしの別れはなんともないのです

あなたはただ

ゆらめく海をラジオと渡っているだけ

十月十日待ったら帰ってくると

約束しましたし

私はあなたを待つことが

けっこう好きです

声が聴けないのを

ときおり

さびしく思います

きりんの封筒の

お手紙に切手を貼れば

こちらは醤油の雨です

そちらもチリソースの雨ですか

とお返事がくるでしょう

私かというと

書けることといたら

自分の不運ばかり

なのであなたと一緒にしたいことを

綴ろうとおもいます

トマトと玉ねぎを刻んで

にんじんをすりおろしてもらって

マリネしていたリモンチェッロで乾杯をする
タコスパーティーがしたいです
それからあなたの勇敢な
旅の面白い話でたくさん笑って
バスタブで酔っぱらってキスをして
コットンキャンディ・グレープ
を口に運んでもらって
あなたに甘やかされたい
サメ抱っこで
いつまでもいつまでも
あなたとくっついて寝たい
でも寝返りはうちたい
目が覚めたら
初デートに寄ったバーで
ひさしぶりにお酒を飲みたい
果物カクテルをゆっくりかき回して
三軒茶屋の路地裏で
ほどけるようなキスを交わしたい
そういえば
あなたから預かったアマレットも
枯らさないように
毎日見えています
私は植物枯らしの常習犯ですが
パリッと花が咲いたら写真を同封します
ですので海面のカーブから
私が見えなくなったからといって
悲しそうな顔をしないでください
私はここにいます
いつの日も

海のおいがする

あなたをずうっと待っています

なので早く航海の帰路についでください

私はあなたに一刻も早く会いたいです

P.S. 小さなウミガメをつれて帰ってきてくれると、私は大喜びします

私の赤色

片桐卯芽

昨日が土曜日だったから

日曜日だって分かった

昼下がりの上野

騒がしいカフェ

赤ん坊が泣いていた

知らない言葉や 政治や 神の教えが

ざわざわのさばって

全部がないまぜになる

吊り下げられたライトはゆらゆら笑う

サンドイッチを齧る君

いびつな歯形が目につく

からしマヨネーズに滲む目の縁

嫌いじゃないけど得意じゃない

そんなものばかり

私の視線は

昨晚塗り替えたマニキュアに

ぼとり と落ちた

同じくらい鮮やかな赤色が

真っ白なカップにこびりついている

飲み込んだため息の名残

冷房はエチオピアの風を運ぶ

理解不能な異国語をかき分けて

隣のおばさんたちの

てんでバラバラな世間話をきこう

息子が結婚したのでもお相手の実家がなんかすごく田舎で

そう、お隣さん入院したらしいんだけどあそこ奥さんも身体が

明日食べるお米もないもんお弁当どうしようって毎朝

話し相手は

当然友人 かもしれないし

大きな窓ガラスに映る自分 かもしれないし

もしかしたら私 かもしれない

だって私も いつかはあんな風に

厚かましく目の裏に残るような赤色の

口紅を引くようになる

爪の間に溜まったマヨネーズ

ねえ

いつになったら私のサンドイッチは来るの

ずっとおとなしく待っているのに

ねえ

いつになったら私

この身体の内側のこと

くつきり はつきり

わかるようになるの

いい子にして待っているのに

こんなことなら

私は駄々をこねたい もっと盲目的に
いつからできなくなったのかわからない

深緑のエプロンを固結びしたウエイトレスが

最大限の駆け足でサンドイッチを届けてくれた

変に勿体付けて はみ出たトマトを押し込む

あんまり見ないでよ

酸や嫌味や愚痴に削られたリアス式の

私の歯形

やわらかな乳歯を 取り落としたのは いつ

つやつやした練乳みたいな とろけるような白

きらきら光る奥歯が軋む

ベッドメリーにふさわしくないような気持ちばかり

頭の上でぐるぐる回っている

君の輪郭ばかりが鮮明になる 午後の光の中で

カビになりたい

島崎碧

生まれ変わったらカビになりたいと、大真面目に言ったものだが、気づけば笑いものにされていた。こちらを指さしながら「何でまたカビなの」と涙目で笑い転げる友人たちを横目に、ワインを一口流し込んだ。隣で誰かが「私は鳥」と言った。

いいよ。あんたが死んだら、次は鳥になるのを手伝ってあげる。お望みの羽をつけて、あんたが空を飛ぶのを手伝ってあげる。わたしは名もなきただのカビ。あんたが死んだあと、人間の皮膚を脱いで鳥の身体に生まれ変われるように、わたしがあんたを食べてあげる。

生まれ変わったらカビになりたい。今世での至らなさを埋め合わせるために、糸の終わりと始まりを結び止めるために、次の一生を使いたい。ピリオドを打つことは終着ではなく次の言葉を始めるための手順なのだと、理解するのに随分時間がかかった。一度うまく行かなくなったらもうおしまいだと、本気で信じ込んでいた。放っておけばダメになる白菜はキムチにしてしまえばいいことを、なんでもっと早く思いつかなかったのだろう。

生まれ変わったらカビになりたい。それくらいのわがままを許してほしい。多くは望まない。ただ生まれ変わることができるのなら、どうかわたしをカビにしてください。

大きな身体を持つこと、言葉を話し、欲があり知恵があり、肉を食べ、二足歩行で歩くこと。こうして偉く威張っていたところで、しまいには身を滅ぼすんだから、そんなものは一切捨て去りたい。生態系の最後のおこぼれを食べ、スタート地点に戻すただのか弱いカビでありたい。

どうしてそんなに簡単じゃないのだろう。今の生活は全てが遙か身の丈を超えて、まるで手に負えないような気がしていた。ワイングラスを片手に数十人の酔っ払った顔を眺めるくらいなら、あなたと向かい合って話がしたい。それとも、いつそカビになったら、そんなことだってよくなってしまいうだろうか。

夕林

黒田新

如何様にも生きていく時代に

こびりつく損得勘定

他人の膝の上で浅く息をするたびに
個の境界がゆるみ

零と一の信号が血管に入り込んで

身体の髓が削れていく

陸で漂流し

宛てもなく線路を転がっていく途中

地表に足を踏み入れ

土を固めた像を蹴り飛ばしても

机の上のキーボードの冷たさで

心拍数を下げていても

地球は一秒たりともこぼさず

知らぬ顔で瞬きを繰り返している

コンクリートの木々の足元

ほんの静かな酸素の中で

もう一度呼吸を覚え直す夕方

誰もいないことを確かめながら

思い出に酒をかけゆつくりと燃やし

その灰と陽を眺める

それだけが楽しくて

今は呪いたくなるほど何も足りない

夢の骨のかけらを

ただ握りしめている

ない一輪車

赤羽日菜

生まれた時から一度も
あったことなんてない

一輪車

に

今日からぼくは

乗らなければならない

かたむいた三日月

その日 生まれたての足たちが

ふかく車輪にむかって

絡まり

もったいぶったように

融合

きみが

ぼう、と喉をならした

言葉を

取り逃がす蟬になって とたん

まわりだす十字架

あいにく

日々を乗れるようになっても

空が晴れることはない

転んだふりをして

地球のかたち

ぼくですら気づかない
うねり曲がる木々の間に
まだ……

い
く
ら
か

い
び
つ

に

な
る

ことを

神のいない星では
信者たちが
赦している

目を伏せてばかりで

きみはまだちつとも

生まれてなんかいない

ないペダルがまた跳ねて
ぼくを

転がす

なんどもなんども

ほ

意味のない轍を描く

からの轍

ほ
ほ
ほつ

何も知らない

ことを

知っている、

ことは

不自由だから

宙に

不自由

家の裏の緑を見てトトロがいそうというわたしに
そこはゴルフ場なんだと　いう

潔さ

は

絡まった足

透けたくつ　いつしか

ぼく

すべて知っているふりから

なにも知らないふりまで　乗りこなす

不自由

そういえば、

氷床にしずむ

人に残された

残り少ない轍

そのさなかに　ふと

いつか今日の日を思い出す日のことを思い出す

そうだ

止まることを教わらなかったから

もう

二度と降りれない

十九、五七三回目の三月

ずっとないことだけがあつた

ほったらかし温泉

吉田開

すこし涼しくなってきたか

祭りの声に見送られて東京をでる

直売所でおばさんがブドウをくれた

神社であつた子供は口数がすくない

角材にビーサンをぶつけて爪がなくなった

富士山につくとそこには花火が

そでについたアリ

理不尽な途中下車をさせられたおまえが

羨ましい

タブーワンダーランド

荒川十嬉

やっほー

竜宮城いこー

つって

高速乗った

観光バスに追い抜かれた

図体ばかりでかいくせに

どうせ車内では無音なくせに
なにくそ

踊れ

あのバス竜宮城ゆきだ

ミスった

ツアーでよかったじゃん

みんなで踊りたかったな
なにくそ

まあいいや

踊れ

逆立ちしろ

大丈夫 海底でひっくり返っても

どうせ水の中なんだし

波越えてこれてるんだし

もう怖いものなしなんだし

踊れ☆ブギーワンダーランド☆

人たちは一生酸素を見たことないし

魚たちは一生海を見ることはないのさ

え、これ、御法度？

まずった

ごめんごめん

竜宮城マナー 知らなかった

うち海より山派家庭だったから

しかたがない

踊れ

魚と人の違いなんてわかるわけないんだから

誰かわたしを捌いて中身を見せてくれないかな

踊ってたらなんかちよつと喉渴いたわ

水飲んでいい？

海水って飲んじゃだめなんだっけ

あれ

どうしよう

しくった

☆

踊れ

カバン一つ持って家を出た
まだ早いのにふくれた地下鉄に乗って
向かった先は大学じゃなかった
まだ一回目だから許してください

正直この書き方もう飽きたけど
手放せなくなってる
じゃあこの環世界の中に
もう一つ環世界をつくればいいんじゃない？（図1）



図1．世界の中の環世界、その中の環世界の図

せっかく完璧にした髪の毛は
梅雨に丁寧な揉まれた
おろしたての上下も汗をかいている
早起きした僕の目が休むことを
双子が覆って許さない

早起きして夢を見に行く人の群れ
夢から覚めた労働者の日常
早く LINE を返したいのに
役に立たない電波
電波のいない改札の外
落ち着かない指先
見紛うはずのない僕の光
おかげで雨は止んだが
傘はまだ忙しそう
外国人観光客がたくさん
こんな早いのにすごいな
現実から逃げ出してきた女子高生
彼女らのそれはまだコスプレではない
大人になりたい小人たちは
小人のまんま待ちきれない目を
まんまるにしている
まんまるな目はやがて
朝の水溜りに同化する
それを見てイラつく父親
同文、母親
刻一刻とせまりくる夢
夢は現実ではないが嘘ではない
ようやく見られた夢は
何よりも甘美で
大人になってしまった僕も
小人にもどったようだった
夢の時間はその輝きが
僕の目に届くように
一瞬で

普段の木曜日の 90 分は
どんなに長いんだろうか
僕はこの幸せを味わうために
毎週木曜日手ぶらでも
授業に出てたんだ
少なくとも
半年後には
またそんな一瞬を
訪ねに行くんだろう
何度でも

さて
来週はちゃんと来るかって
ちゃんと行くよ多分
分からないけど